

歴代誌第一 16 章 8 – 12 節 「主への賛美」

1 A 主に感謝する

2 A 御名を呼び求める

3 A 民に知らせる

4 A 主に歌う

5 A 尋ね求める

本文

歴代誌第一 16 章を開いてください。私たちは午後に、14 章から 17 章までを学んでみたいと思います。ダビデはイスラエルの勇士たちによって、全イスラエルの王となりました。そして彼はその軍人たち、また一般のイスラエル人に相談して、神の箱をエルサレムに運ぶことはよいと判断しました。けれども、神の箱を牛車によって運んだために、箱が倒れそうになってそれをつかんだウザが打たれて死んでしまいました。

そこからダビデは、レビ人を集めました。レビ人に神の箱を担がせてエルサレムに運んでいったのです。その時にレビ人には歌をうたわせました。そして今、エルサレムにダビデが予め用意した天幕に神の箱を安置しました。そして、主に対して誉め歌をうたったのです。ダビデによって初めて礼拝の中に賛美の歌が組み込まれました。祭司とレビ人に、常時、楽器を奏でて主に歌をうたうように命じました。

私たちが交読文で読んだ、歴代誌第一 16 章 7 節から 36 節までは、基本的にはダビデがレビ人たちに、「このように行いなさい」と命じ、勧めているような内容になっています。礼拝において、何をもって賛美をするのかを教導するための歌であります。ここの賛美には、「・・・せよ」という呼びかけ、また命令がたくさん列挙されています。その一つ一つを私たちも行うことによって、神の御心を行なうことができます。一つ一つを見ることができれば幸いです。今朝は、8 節から 14 節までにある勧めの言葉に注目したいと思います。

1 A 主に感謝する

一つ目は、「主に感謝する」ことです。8 節にあります。私たちは、神の祝福を当たり前のようにしてしまいます。パウロは、コリントにある教会に、「あなたは、何か、もらったものでないものがあるのですか。（1 コリント 4:7）」と問いかけていますが、私たちはしばしば、自分の持っているものが主から与えられたものであることを忘れてしまいます。信教の自由が制限されている国に住むクリスチャンたちは、礼拝において、「今日、ここであなたに礼拝ができることを感謝します。」と祈ります。警察が来ることがなく、静かに、自由に礼拝ができることは決して当たり前のことではないのです。私たちは信教の自由こそありますが、賃料がとてつもなく高い東京中心部で、このようなすばらしい建物の中で礼拝が守られていることは、決して当たり前のことではありません。一

方的に恵んでくださっているものであります。私はここに来るたびに、私たちの教会が礼拝できていることに感謝しています。

そして私たちは、しばしば祈って、その答えが神から与えられたことについて、感謝することを忘れています。イエス様のところに、遠くから十人のらい病人が来ました。「イエス様、どうぞ憐れんでください。」と叫んでいます。イエス様は、「行きなさい。そして自分を祭司に見せなさい。」と言われました。その行く途中十人は癒されました。その一人が、自分の癒されたことを知ると、大声で神をほめたたえながら引き返して来て、イエス様の足元にひれ伏して感謝しました。彼はサマリア人でしたが、感謝を捧げに来たのは十人のうちこの一人だけでした。

(以上ルカ 17:11-19) 私たちも同じように、祈りを捧げて主が答えてくださっているのに、それを忘れていることがあります。サマリア人のように、普段は神の恵みから離れている人が、その恵みに触れて感謝していますが、むしろ数多く神の恵みに触れている人たちが、それが当たり前になって感謝しないことがあります。だから、「主に感謝せよ」とダビデは、レビ人たちに指示しているのです。

2 A 御名を呼び求める

次に、「御名を呼び求めよ」と命じられています。御名は、ここに書いてあるように、新改訳の太字の「**主**」であります。これが、イスラエルの神の名です。

先週、新しく来られた方と話していて、「心の安寧のために祈るのだが、だれに対して祈っているのか漠然としている。」という言葉を残しておられました。そうですね、いったい誰に対して祈っているのか、話しかけている対象がはっきりしていないといけません。ホレブ山で、モーセに主が現れてくださいました。主はモーセにエジプトに帰りなさい、そしてエジプトからイスラエル人を連れ出さなさい、と命じられます。そこでモーセが尋ねました。「モーセは神に申し上げた。「今、私はイスラエル人のところに行きます。私が彼らに『あなたがたの父祖の神が、私をあなたがたのもとに遣わされました。』と言えば、彼らは、『その名は何ですか。』と私に聞くでしょう。私は、何と答えたらよいのでしょうか。」(出エジプト 3:13) 」

これがまさに、今言った疑問であります。神と言っても、どの神なのか？ 彼の名は何なのか？ という疑問です。真剣に祈ろうとする人、神を求めようとする人なら、その神が誰であるのか？ と思うわけです。「神」という言葉は名前ではありません。「神」というのは、「自分がこれがなければ生きていけない、というような、自分の主な情熱」と言い換えたらよいでしょう。もし今、自分の趣味があって、その趣味がなければやっていけない、毎日そのことばかり考えている、という状態であれば、その趣味が神なのです。聖書時代には、一つ一つの神の名前が付いていました。権力が欲しければ「バアル」という神がいました。セックスを求めれば、「アシュタロテ」また「アシェル」という女神がいました。ポルノです。そして快楽を求めるならば、「モレク」という神がいました。富を求めるならば、「マモン」という神がいました。ですから、自分が活路を見出している欲求、また欲望があれば、それが神なのです。

そこで、主がモーセに現れてくださった時に、「わたしは、『わたしはある。』というものである。（14 節）」と言われました。また「主（ヤハウェ）」であると言われました。ヤハウェというのは推測で付けた呼び名であり、聖書には YHVH という子音だけで書かれています。ユダヤ人の人たちは、この名はあまりにも神聖であるから、この汚れた口から発することさえ戒めなければいけない、として、あえて母音を付けないのです。けれども、ヤハウェではないか？と推測されています。

そして、「わたしはある」という名前ですが、これは「あなたの必要であれば、それになる」という意味合いがあります。アブラハムがイサクを捧げようとした時に、「ヤハウェに備えあり」という名でありました。イサクではない雄羊を神が備えてくださったからです。モーセたちがアマレク人と戦う時は、「ヤハウェは旗である」つまり、主が戦いになってくださる、ということです。士師ギデオンが、ミデヤン人と戦うのを恐れていた時は、「ヤハウェ・シャローム」となっていました。シャロームすなわち平和となっていました。そしてエルサレムの町が不法と悪に満ちていた時、エレミヤに対して主は、「ヤハウェ・ツイドケヌー」「主は正義」となっていました。

そして、私たちの必要で最も大きいのは、救いです。罪からの救いです。罪は私たちを神から引き離し、私たちを死に至らしめ、地獄に陥れるその罪からの救いが必要です。「ヤハウェ・シュア」「主は救い」となっていました。その短縮形が「ヨシュア」であり、ギリシヤ語で「イエス」であります。天使がヨセフに、「マリヤは男の子を産みます。その名をイエスとつけなさい。この方こそ、ご自分の民をその罪から救ってくださる方です。（マタイ 1:21）」と伝えました。

これで、私たちが御名を呼び求めよ、と命じられている理由がお分かりになったかと思います。漠然と、「神様！」と呼んでいるわけではありません。自分の罪があり、この罪によって自分は死に、死んだ後に裁きを受けるという定めに対して、「イエス様助けてください」と呼び求めるのです。そしてこの名は、他にすぐれていると言われている名よりも、はるかにすぐれた名であります。「この方以外には、だれによっても救いはありません。世界中でこの御名のほかには、私たちが救われるべき名としては、どのような名も、人間に与えられていないからです。（使徒 4:12）」「それゆえ、神は、キリストを高く上げて、すべての名にまさる名をお与えになりました。（ピリピ 2:9）」私たちの主は、私たちの必要になってくださる方です。この方の名を呼び求めているでしょうか？

3 A 民に知らせる

次の勧めは、「みわざを国々の民の中に知らせよ」であります。主が自分にしてくださったことを、人々の中で知らせることです。特にイエス様をまだ知らない人々の中で知らせることです。イエス様は言われました。「しかし、聖霊があなたがたの上に臨まれるとき、あなたがたは力を受けます。そして、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、および地の果てにまで、わたしの証人となります。（使徒 1:8）」

イエス様を証しすることは、とても簡単なことです。自分の内で主が行ってくださったことを話せばよいからです。

多くの人が、特別な訓練を受けなければ証しをすることはできないと考えています。いいえ、イエス様は「イエスはそれをご覧になり、憤って、彼らに言われた。「子どもたちを、わたしのところに来させなさい。止めてはいけません。神の国は、このような者たちのものです。(マルコ 10:14)」子供でもできることです。私が新しくクリスチャンになったばかりの時に、自分の家に訪問するエホバの証人の人たちにどのように伝道すればよいか悩みました。ある人がこうアドバイスしてくださいました。「救いの証しを話すのが良いです。」なるほど！と思いました。それでやってみました。相手の人に、「救いの証しをしてください」と話したら、あらまあ、救われた、罪が赦されたという体験はしていなかったのです。

ですから、難しいことはありません。けれども、お尋ねします。救いの証しをすることができますか？もし、「あなたにイエス様がどのように働いてくださったか、教えてくださいませんか？」と聞かれた時に、教えることはできるでしょうか？もし、戸惑う、そのようなものは分からないというのであれば、今、自分が救われているかどうかよく確かめたほうが良いです。使徒パウロは、「あなたがたは、信仰に立っているかどうか、自分自身をためし、また吟味しなさい。(コリント人への手紙第二 13:5)」と言いました。自分が信じていると言っても、だれを信じているのかが問題です。自分が信じていると言っても、何を信じているのかが問題です。また教会に来ている、クリスチャンのようにふるまうことができる、賛美の歌をうたうことができる、ということでは救われていることになりません。自分の信仰を吟味する必要があります。

そして、たとえその体験を持っていても、自分のプライドが邪魔をして、自分のことを話せないということもあります。「このような恥ずかしい過去を知られてしまったら、どうしようか？」という悩みもあるかもしれません。けれども、神の恵みによって救われたというのは、自分が罪の中で死んでいたということを認めるに他なりません。聖書の話について、また他の人々についての評価、他の人々の世話はできても、では果たして自分自身がどのように救われたのか、ということをお話しないことは、自分の心がまだ神の前にへりくだっていないし、神の恵みを十分に受け取っていないこととなります。

教会は、へりくだった者たちの集まりです。へりくだった者とは、主の前における自分をそのまま他の人々に分かち合うことのできる人です。その弱さの中にキリストの恵みが完全な形で現れます。そして、へりくだった者たちが集まると、そこに人々が入ってくるすることができます。一つになることができます。積極的に、主のみわざを他の人々に知らせていってください。

4 A 主に歌う

そして次に、「主に歌え。主にほめ歌をうたえ。」とあります。歌というのは、古今東西、人々に慕われるものです。歌はもともと、神が人に与えた賜物だからです。自分の思っていること、感じていることを深い部分で分かち合うことのできる手段だからです。私は歌が苦手なタイプですが、けれども、面白いことに何か話したいことがあったら、ミュージカルみたいに、歌にしてしまっていることがあります。いつの間にかそれをやっています。最近上映された映画「レ・ミゼラブル」も、ミュージカルにしたからこそ、登場人物の心を深いところで通わせるこ

とができたのではないのでしょうか？

私たちキリスト者は、歌にして主をほめうたうことが命じられています。「詩と賛美と霊の歌とをもって、互いに語り、主に向かって、心から歌い、また賛美しなさい。（エペソ 5:19）」礼拝讃美というのは、心から歌うものです。そして、聞いておられる方は主ご自身です。どのように演奏できたのか？ということに気になってみたり、他の人たちと声を合わせて歌うことができたのか、ということに気になってみたりするのは、主に対して非常に失礼なことをしています。主役は誰なのか、観客は誰なのかを知る必要があります。感情的になることを恐れなくてください。もちろん、自分ばかりが目立つように歌ったり、踊ったりして、イエス様ではなく自分に注意がそれてしまうようでは間違っています。けれども、歌う目的は上手にうたうことではありません。自分の主に対する想いを深いところで言い表すための手段にしか過ぎません。

そして、「キリストのことばを、あなたがたのうちに豊かに住ませ、知恵を尽くして互いに教え、互いに戒め、詩と賛美と霊の歌とにより、感謝にあふれて心から神に向かって歌いなさい。（コロサイ 3:16）」キリストのことばを豊かに住ませることをします。この前の火曜日に、ヘブル書の学びを行ないました。イエス様のすばらしい救いについて読みました。私の心は歌いたくなりました。キリストのみことばが豊かに住んだからです。そして知恵を尽くして互いに教えます。そして戒めます。私たちの生活の具体的なところで、兄弟が知恵を尽くして主にあって戒め、励まします。「私のことは、だれにも否定されたくない。私は我が道を生きます。」という人の心には神への賛美は沸き起こりません。知恵よっての語りかけ、戒めを受けて、それで主を感謝にあふれて歌うことができるのです。

そして、歌にはいろいろな形態があります。「詩」というのは私たちの聖書にある詩篇です。私たちは交読文の中で朗読しますが、元々はメロディーをつけて歌うためのものです。そして賛美があります。これは、しっかりと歌詞がついて確立している歌のことです。多くの伝統的な教会で「讃美歌集」というものから歌います。私たちの教会では聖餐式の時に歌っています。それから「霊の歌」です。これは即興的に、御霊の流れの中で与えられる歌、もっと流れるような歌がこれに当たります。ワーシップやプレイズと呼ばれているものは、この部類に入ります。ですから、どれが優れている、どれが不必要だ、そういうものはないのです。

5 A 尋ね求める

そして、少し飛んで 11 節に行きますと、「主とその御力を尋ね求めよ。絶えず御顔を慕い求めよ。」とあります。私たちには、神は探究する情熱を与えてくださっています。これはいったいどういうことなのか？と疑問に思ったら、それを尋ね求め、調べる情熱を与えておられます。私は幼い頃に、ブロックのおもちゃが与えられて、親が言うには何時間も飽きずに遊んでいた、と言われます。一つのことを尋ね求めて、没頭するのです。

聖書、神の御言葉についても、その真理を尋ね求める心が必要です。今、自分の前に与えられている聖書の本文を見て、ちょっと読んで分からないからあきらめる、というのであれば、聖霊がせっかく与えておられる

悟りをみすみす逃してしまうことになります。主に祈り求めて、尋ね求めて、そうすれば与えられます。

そして、ここでは「主とその御力を尋ね求めよ」とあります。私たちが思いを潜めなければいけないのは、主ご自身、そしてその御力です。主についてのことを知るではありません。主ご自身を知るのです。これには、尋ね求めが必要です。情熱が必要です。何としても離れない、あきらめないしつこさが必要です。そして、神の力を知ります。神が与えておられる、キリストにある復活の力を知ります。神の力について話す時に、「私にはその力は与えられていない。」と漠然とした思いであきらめることが多々あります。いいえ、尋ね求めるのです。しつこいほど願うのです。そうすれば、神は戸を開いてくださいます。上から聖霊を与えてくださいます。

たった三節しか見ませんでした、こんなにもたくさんのことを教わります。主に感謝をささげよ、御名を呼び求めよ、主のみわざを神を知らない人々に知らせます、主に歌をうたいます。そして主を尋ね求めます。ダビデが祭司とレビ人に、こうやって歌いなさいと指示した詩歌はこれだけ指導、教えに満ちています。この詩歌を読んで、命令形になっているところに目を留めてください。そして、一週間、自分がこれらを行なっているかどうか確認してみてください。そこに、主が確かに自分を治めておられる、神の国が臨んでいることを感じ取ることができるでしょう。